

半七捕物帳

新力チカチ山

岡本綺堂

青空文庫

明治二十六年の十一月なかばの宵である。わたしは例によって半七老人を訪問すると、老人はきのう歌舞伎座を見物したと云った。

「木挽町こびきちょうはなかなか景気がようござんしたよ。御承知でしょうが、中幕は光秀の馬ば盥だらひから愛宕あたごまでで、団十郎の光秀はいつもの洩いところを抜きにして大芝居でした。愛宕の幕切れに三宝を踏み砕いて、網襦袢の肌脱ぎになって、刀をかついで大見得を切った時には、小屋いっぱいの見物がわつと唸りました。取り分けてわたくしなぞは昔むかしもの者ものですから、ああいう芝居を見せられると、総身そうみがぞくぞくして来て、思わず成田屋アと呶鳴りしましたよ。あははははは」

「まったく評判がいいようですね」

「あれで評判が悪くちやあ仕方がありません。今度の光秀だけは是非一度見て置くことですよ」

老人の芝居好きは今始まったことではない。わたしのような若い者がこの老人に嫌われ

ないのも、こいつは芝居好きで少しは話せるというのが一つの原因になっているらしい。

したがって老人と向かい合った場合、芝居話のお相手をするのは覚悟の上であるから、わたしも一緒になつて頻りに歌舞伎座の噂をしていると、老人は又こんなことを云い出した。

「今度の木挽町には 訥とつしよう 升しやう が出ますよ。助高屋高助のせがれで以前は源平と云つていま

したが、大阪から帰つて来て、光秀の妹と 矢やぐち 口くち 渡わた のお舟を勤めています。三、四年見

ないうちに、すっかり大人びて、矢口のお舟などはなかなかよくしていました。いや、矢

口と云えば、あの神靈矢口渡という芝居にあるようなことは勿論嘘でしょうが、矢口渡の船頭が足利方にたのまれて、渡し舟の底をくり抜いて、新田義興にったよしおき の主従を川へ沈めたと

いうのは本当なんでしょうね」

「そりやあ本当でしょう。太平記にも出ていますから……」

「子供の話にある、カチカチ山の狸の土舟つちぶね というわけですね。その矢口渡に似たような

事件があるんですが……。恐らく太平記か芝居から思い付いたんじゃないでしょうか」

「矢口渡に似たような事件……。それにはあなたもお係り合いになつたんですか」

「かかり合いましたよ」

こうなると、芝居の方は二の次になつて、わたしは袂に忍ばせている手帳をさぐり出す

ことになった。狡すいと云えば狡いが、なんでも斯ういう機会を狙って、老人のむかし話を手繰り出さなければならぬのである。それは相手の方でも万々察しているらしい。

「はは、いつもの閻魔帳が出ましたね。これだからあなたの前じやあうつかりした話はない」

老人は笑いながら話し始めた。

「文久元年一月末のことと御承知下さい。ほんとうを云うと、この年は二月二十八日に文久と改元のお触れが出たのですから、一月はまだ万延二年のわけですが……。その頃、京橋の築地、かの本願寺のそばに浅井いなばのかみ因幡守という旗本屋敷がありました。三千石の寄よりあ合いで、まず歴々の身分です。深川の砂村に抱え屋敷、即ち下屋敷しもがありまして、主人をはじめ家族の者が折りおりに遊びに行くことになっていました。そこで一月の末、なんでも二十六七日頃だと覚えています。この年は正月早々からとかくに雨の多い春でしたが、二十二三日からからりと晴れて、暖い梅見日和がつづいたので、浅井の屋敷では主人の因幡守が妾のお早と娘のお春を連れて、砂村の下屋敷へ梅見に出かけることになりました。因幡守は四十一歳、お早は二十四歳、お春は十五……ちよっとお断わり申して置きますが、このお春というお嬢さまはお早の妾腹ではなく、お蘭という奥さまの子で、奥さまはそれ

ほどの容貌きりようよしでもなかつたが、その腹に生まれたお春は京人形のように可愛らしい、おとなしやかなお嬢さまであつたそうです。

そこで主人側は因幡守、お早、お春の三人、それにお付きの女中が三人、供の侍が三人、中間が四人でしたが、船が狭いので侍や中間は陸おかを廻り、主人側三人と女中三人は船で行きました。船宿ふなやどは築地南小田原町ちようの三河屋で、屋根船の船頭は千太という者でした。無事に砂村へ行き着いて、一日を梅見に暮らして、ゆう七ツ（午後四時）頃に下屋敷を出て、もとの船に乗つて帰る途中、ここに一場の椿事しゅつたい出来に及びました」

「矢口渡ですか」

「そうです、そうです。矢口渡か、カチカチ山です」と、老人はうなずいた。「わたくしは現場に居合わせたわけでもありませんから、見て来たようなお話は出来ませんが、帰る時も前と同様に、供の男たちは徒歩かちで陸を帰り、主人側三人と女中三人は船で帰ることになつて、船頭の千太が船を漕いで、小名木川おなぎをのぼつて行きました。御承知の通り、深川は川の多いところですが、この時は小名木川の川筋から高橋、万年橋を越えて、大川筋へ出ました。ここは新大橋と永代橋のあいだで、大川の末は海につづいている。その川中まで漕ぎ出した頃に、どうしたものか、屋根船の底から水が沁み込んで来ました。女中たち

が見つけて騒ぎ出す、主人もおどろく、船頭も驚いてあらためると、船底の穴から水が湧き込んで来るんです。慌てて有り合わせた物を栓にさしたが、どうも巧く行かない。ふだんならば此の辺に何かの船が通る筈ですが、あいにく夕方ではかの船も見えない。そのうちに水はだんだんに増して来て、大きくもない屋根船は沈みかかる。船頭は大きい声で助け船を呼ぶ。女中たちも必死になつて呼び立てる。それを聞きつけて、佐賀町ちようかしの河岸から米屋の船が二艘ばかり救いに出て来ましたが、もう間に合わない。あれあれと云ううちに、船はどうとう沈んでしまいました」

文久元年といえ、今から三十余年の昔話であるが、その惨事を聞かされて、わたしは思わず顔をしかめた。

「誰も助からなかつたんですか」

「船頭は泳ぎを知っているから、いざというときに川へ飛び込んで助かりましたが、因幡守という人は水みづこころ心こころがなかつたと見えて沈みました。ほかは女ばかりですから、妾のお早、娘のお春を始めとして、三人の女中もみんな流されてしまいました。さあ大騒ぎになつて、すぐに築地の屋敷へ知らせてやる。屋敷からも大勢が駆けつけて、幾艘の船を出して死骸の引き揚げにかかりましたが、もう日が暮れて、水の上が暗いので、搜索もなかな

か思うように行かない。それでも因幡守とお早と女中二人、あわせて四人の死骸を探り当てましたが、娘のお春と女中のお信のぶ、この二人のゆくえは知れませんでした。

浅井の屋敷ではもちろん相当の金を使ったのでしよう。関係者一同に固く口止めをして、その船に乗っていたのは妾と娘と女中ばかりで、主人の因幡守は駕籠で帰った為に無事であったと云い触りました。それから四、五日後に因幡守は急病頓死の届けを出して、当年十七歳の嫡子小太郎がとどこおりなく家督を相続しました。こういうことは、屋敷の方で何かのぼろを出さない限り、上かみでは知らぬ振りをしているのが其の当時の習いでしたから、すべてが無事に済みました。しかし濟まないのは、その船の詮議です。たとい主人の因幡守が乗っていないとしても、三千石の旗本の娘と妾と三人の女中を沈めた一件ですから、災難だとばかりは云っていられません。どうして船底から水が漏ったのか、一応の詮議をしなければならぬのですが、船頭の千太は後難を恐れたとみえて、船宿の三河屋へ一旦帰りながら、その晩のうちに何処へか姿を隠してしまいました。

こういう場合に逃げ隠れをすると、かえって本人の不為ふためになるばかりか、主人の三河屋にも迷惑をかける事になる。千太が姿を晦くらました為に、三河屋はいろいろの吟味をうけて、大迷惑をしました。考えようによつては、主人が知恵をつけて千太を逃がしたようにも疑

われますから、猶更むずかしい事になりました。というのが、だんだん調べてみると、この一件が唯の災難でなく、そこには何か入り組んだ秘密があるらしく思われたからです。

たくさんの旗本屋敷のうちには随分いろいろのごたごたがあります。しかし身分が身分ですから、まあ大抵のことは大目に見ているんですが、今度の一件は三千石の大家たいけの当主が死んでいるんですから、上かみでも捨て置かれませんか。家督相続の問題はひとまず無事に聞き届けて置いて、それから内密に事件の真相を探索することになりました。まかり間違えば、三千石の浅井の家は家督相続が取り消されて、さらに取り潰しにならないとも限らないのですから、その時代としては容易ならない事件とも云えるのです。

そのお荷物をわたくしが背負わされました。役目だから仕方が無いようなものの、町まち方と違って屋敷方の詮議は面倒で困ります、町屋まちやならば遠慮なしに踏み込んで詮議も出来ませんが、武家屋敷の門内へは迂濶うかつにひと足も踏み込むことは出来ません。殊にわれわれのような商売の者は、剣もほろろに追い払われるに決まっていますから、いわゆる盲の垣のぞきで、外から覗くだけで内輪の様子はちつとも判りません。これには全く閉口です」

「今でも華族の家庭の事なぞは調べにくいのですから、昔は猶更そうでしたらうね」

「見す見す武家の屋敷内に大きい賭場が開けているのを知っていても、町方の者が踏み込

むことの出来ない時代ですから、大きい旗本屋敷に關係の事件などは、自由に手も足も出ません。それでも何とかしなけりやあならないから、出来るだけは働きましたよ。まあ、お聴き下さい」

二

文久元年二月なかばの曇った朝である。浅井一家の人々がこの世の名残なごりに眺めた砂村の下屋敷の梅も、きのうきようは大かた散り尽くしたであろう、春の彼岸を眼のまえに控えて、なま暖い風が吹き出した。

八丁堀同心、拝郷弥兵衛の屋敷の小座敷で、主人の拝郷と半七とが額ひたいをあつめるように摺り寄つてささやいていた。

「いいか、牛込水道町ちやうの堀田庄五郎、二千三百石、これは浅井因幡守の叔父だ。それから京橋南飯田町まちの須藤民之助、八百石、これは因幡の弟で、須藤の屋敷へ養子に貰われて行ったのだ。ほかに親類縁者も相当にあるが、堀田と須藤、この二軒が近い親類になっているので、それから町方へ内密の探索を頼んで来ている。深川浄心寺脇の菅野大八郎、二

千八百石、これは因幡の奥方お蘭の里方さとかたで、ここからも内密に頼んで来ている。殊に菅野の申し込みは手きびしい。万一それがために浅井の屋敷に瑕きずが付いても構わない。是非ともその実証を突き留めて、いよいよ不慮の災難と決まればよし、もし又なにかの機関からくりでもあつたようならば、係り合いの者一同を容赦なく召捕つてくれと云うのだ。まかり間違えば浅井の屋敷は潰れる。それを承知でどしどしやってくれと云うのだから大変だ。どうもいい加減に打つちやつては置かれねえ事になつた。半七、しつかりやつてくれ」

「まったく打つちやつては置かれません」と、半七も云つた。「武家屋敷の奥のことは判りませんが、この一件以来、浅井の奥さまは半氣違いのようになつてゐるそうです」

「無理もねえ。妾はともあれ、亭主と娘を一度になくしてしまつたのだから、大抵の女はぼつとする筈だ」と、拝郷も同情するように云つた。「里方の菅野からは用人を便によこしたのだが、その用人の話によると、浅井の奥方のお蘭というのは今年三十七で、小太郎とお春のおふくろだ。亭主の因幡は若い時から評判の美男で、お蘭はどこかで因幡を見染めて、いろいろに手をまわして縁談を纏めたのだと云うから、惚れた亭主だ。それも病気ならば格別、こんな災難で殺しちやあ容易に諦めが付くめえ。屋敷に瑕が付いてもいいから、その実証を突き留めてくれというのも、お蘭が云い出した事らしい。それを取り次い

で、里方からこつちへ頼んで来たものと察しられる。なにしろ斯ういう仕事は、相手が屋敷だから困るな」

「大困りです」と、半七は溜息ためいきをついた。「まさかに奥さまに逢うわけにも行かず、しかし向うから頼んで来たくらいですから、堀田と須藤と菅野、この三軒の屋敷の用人は逢つてくれるでしょう」

「そりやあ逢つてくれるに相違ねえ。だが、浅井の屋敷へは迂濶に顔を見せるなよ。その屋敷内に係り合いの奴があつて、おれ達が探索していることを覚られると拙まずいからな」

「そうです。まあ、遠廻しにそろそろやりましょう」

「といつて、あんまり気長でも困る」と、拝郷は笑つた。「そこは程よくやつてくれ」

「その船はお調べになりましたか」

「おれが立ち合つたのじゃあねえが、同役の井上が調べに行つて、船は三河屋の前の河岸かしに繋がせてある筈だ。大事の証拠物だから、この一件の落らくちやく着するまでは、めつたに手を着けさせることは出来ねえ。どうせ縁起の悪い船だ。まさかに手入れをして使うわけにも行くめえから、片が付いたら焼き捨ててしまうのだろうが、まあ、それまでは大事に囲つて置かなければならねえ」

「じゃあ、まあ、三河屋へ行つて、その船を見てまいりましょう。又なにかいい知恵が出るかも知れません」

「三河屋へ行つても、あんまり嚇おどかすなよ」と、拝郷はまた笑つた。「この間からいろいろの調べを受けて、亭主も蒼くなつてふるえているようだからな」

「はい、決して暴つぽいことは致しません」

半七も笑いながら別れた。表へ出ると、なま暖い風がやはり吹いている。どうも雨になりそうだと思ひながら、半七はすぐに築地の三河屋へ足をむけた。三河屋はここらでも古い船宿で、亭主の清吉とはまんざら知らない顔でもないので、半七は気軽に表から声をかけた。

「おい、親方はいるかえ」

船宿といつても、ここは網船や釣舟も出す家うちであるから、余りにしやれた構えでもなかつた。若い船頭が軒さきの柳の下に突つ立つて、ぼんやりと空をながめていたが、半七を見て慌あわてて会え釈しゃくした。

「やあ、親分。いらつしやい」

それは船頭の金八であつた。

「おい、金八」と、半七は笑いながら云った。「今度は飛んだ時化しけを食ったな」

「まったく飛んだ時化を食いました。あの日はわっしの出番でしたが、千太がおれに代らせてくれと云って、自分が出て行くと、あの始末。お蔭でわっしは災難を逃がれましたが、千太を身代りにしたようで何だか気が済みませんよ」

「それじゃあ、おめえの出番を千太が買って出たのか。そうして千太のゆくえは知れねえのか」

「あいつは泳ぎますから、無事に揚がつて来て、一旦は家うちに帰ったのですが、あとが面倒だと思ったのでしよう、いつの間にか姿をかくしてしまったので、親方も困っていますよ」

「千太の家うちはどこだ」

「深川の大島町ちやう、石置場の近所ですが、おやじが去年死んだので、世帯しやたいを畳んでしまいました」

「浅井の屋敷で死んだ者は、殿さまと……」

「いいえ、殿さまは……」

「まあ隠すな。おれはみんな知っている。お妾とお嬢さまと女中三人、そのなかでお嬢さまと女中ひとりが揚がらねえのだね」

「そうです。お嬢さまとお信という女中が見付かりません。もうあげ汐しおという時刻なのに、やっぱり沖の方へ持つて行かれたと見えます。そのお信というのは家の親方の姪うぢですから、家でも気をつけて探しているのですが……」

「じゃあ、お信という女中はここの家の姪か」と、半七はすこし考えさせられた。

金八の話によると、お信は親方の妹の娘で、早く両親に死に別れて、七つの年からこの家に引き取られていたが、浅井の屋敷は永年の旦那筋である関係から、行儀見習いのために其の屋敷へ奉公に上げることになった。それはお信が十五の春で、あしかけ七年を無事に勤めて、彼女も今年は二十一になる。去年あたりから暇を取らせようという話もあったが、お信はもう少し長年ちようねんしたいと云い張つて、今年まで奉公をつづけているうちに、こんな事件が出来しゆつたいしたのである。こうと知つたら、無理にも暇を取らせるのであつたと、親方夫婦は悔んでいる。きようまでゆくえの知れない以上はもう死んだものに決まっているのだが、それでも死骸を見ない以上はまだなんだか未練があるので、おかみさんは今日も浅草の観音さまへ御神籤おみくじを取りに行った。親方はかぜを引いたと云つて奥に寝ているとのことであつた。

「お信というのはどんな女だ、容貌きりようはいいのか。馬鹿か、伶俐りこうか」と、半七は訊きいた。

「容貌は悪い方じやありません。十人並よりちつといい方でしようね。人間もなかなかしつかりしているようです」と、金八は答えた。「この家にあの子供がないので、お信さんに婿でも取らせるつもりらしかったのですが、こうなつちやあ仕様がありません。親方もおかみさんもがつかりしていますよ」

「そりやあ気の毒だな。そこで、お信はなぜ暇を取るのを忌^{いや}だと云うのだ」

「よくは知りませんが、屋敷の奥さまが大そう眼をかけて下さるそうで、あんないいお屋敷は無いと始終云っていましたから、そんなことで暇を取る気になれなかつたのでしよう。まったくあの屋敷の方々^{かたがた}はみんないい人で、若殿さまは優しいかたですし、お嬢さまもおとなしいかたですからね」

「そんなにいい人揃いか」

「みんないい人ですよ。それに若殿さまはここらでも評判の綺麗なかたで、去年元服をなさいました、前髪の時分にやあ忠臣蔵の力^{りきや}弥か二十四孝の勝^{かつより}頼を見るようで、ここから船にお乗りなさる時は、往來の女が立ちどまって眺めているくらいでした」

「そういう若殿さまがいるので、お信も暇が取れなかつたのだらう」と、半七は笑った。

「そこで、金八、きようは御用で来たのだ。一件の船というのを見せてくれ」

「船はそこに繋いであります」

金八は先に立って河岸に出ると、かの屋根船も杭くわいにつながれていた。折りからの引き汐で、海に近いこちらの川水は低く、岸のあたりは乾いていた。小さい棧橋を降りて、二人は船のそばに立った。

「おれは素しろうつと人でわからねえが、どうして水が漏ったのだらう。やっぱり底が傷いたんでいたのかな」と、半七は云った。

「さあ」と、金八は首をかしげた。「船が古くなって、底が傷んだのだらうとこのですかね。成程、古くはなっているが、水が漏るほどの事はありませんよ。親方はうっかりした事をしゃべるなど云うので、わっしは黙っていますかね。どうもこりやあ誰かが仕事をしたのだらうと思うのですが……」

「どんな仕事をしたのだ」

「誰かが抉えぐったのですよ。醤油樽の呑口のようにはなっていねえが、船底の少し腐れかかっている所を、むしったように毀こわして置いて、いい加減に埋め木でもして置いたのですよ」

「そんなことは素人出来る筈がねえ。千太の野郎がやったのかな。浅井の人たちを砂村

へ送りつけて、その帰るのを待っているあいだに、千太が何か仕事をしたのだろう。それで野郎、逃亡ふけたのだな」

気のせいか、船は亡骸なきがらのように横たわっている。その船の中へ潜り込んで、半七は隅々までひと通りあらためると、果たして金八の云う通りであった。調べの役人らが出張つた以上、これが判らない筈はない。おそらく事件を内分に済ませるために、浅井の屋敷から手をまわして、役人らをうまく抱き込んで、船底の破損ということに片付けてしまったのであろうと、半七は想像した。それは此の時代にしばしばある習いで、さのみ珍らしいとも思われなかったが、ここに一つの不審がある。事件を秘密に葬るつもりならば、浅井の奥さまや親類たちが町方へ手をまわして、事件の真相を突き留めてくれと云うのが理窟に合わない。一方に秘密主義を取りながら、一方には藪を叩いて蛇を出すようなことをするのはどういふわけかと、半七は又かんがえた。

或いは屋敷内や親類じゅうの議論が二つに分かれているのではないか。一方は家名を傷つけるのを憚はばって、何事も秘密に葬るがよいと云い、一方は飽くまでも其の正体を確かめて、その罪人を探し出すがよいと云う。要するに、何事もお家いえには換えられぬという弱気筋と、たとい家をほろぼしても屹きつと善悪邪正を糺ただせという強気筋とが二派に分かれて、こ

ういう結果を生み出したのでは無いか。いずれにもせよ、自分は役目として、探るだけのことは探らなければならぬと、半七は思った。

「おかみさんは留守、親方は寝ているというのを無理に引き摺り起こすのもよくねえ。きようはこれで帰るとしよう」

半七は岸へあがって金八に別れた。

「親分。傘を持って行きませんか。なんだかぼろ付いてきましたぜ」

「おめえのうちの傘には印しるしが付いているだろうから、何かの邪魔だ。まあ、たいしたこともあるめえ。このまま行こう」

なま暖い風は湿りしめを帯びて、軒の柳に細かい雨がはらはらと降っかけて来た。半七は手拭をかぶって歩き出した。

三

浅井因幡守の屋敷は本願寺のわきで、南小田原町から眼と鼻の間にあるので、半七はすぐにその屋敷へゆき着いた。雨はだんだんに強くなつて来たので、彼は雨宿りをしよう

なふうをして、隣り屋敷の門前に立った。

船底の機からくり関は千太の仕業らしいが、千太自身がそんなことを企らむ筈がない、恐らく誰かに頼まれたのであろう。千太を探し出して引っぱれば、泥を吐かせてしまうのであるが、どこに隠れているか容易に判りそうもない。妾のお早に子供でもあればお家騒動とも思われるが、お早に子供は無い。本妻には男と女の子がある。しかもみんないい人であると云う。それではお家騒動が芽をふきそうもない。

そんな事をいろいろ考えながら、半七は半時ほども其処に立ち暮らしたが、浅井の屋敷からは犬の兎こんま一匹も出て来なかつた。そのうちに雨はますます降りしきるので、半七もさすがに根負けがして、丁度通りかかつた空から駕籠をよび留めて、ひとまず神田の家へ帰つた。日が暮れると、子分の幸次郎が来た。

「とうとう降り出しました」

「ことしはどうも降り年らしい。きょうも降られて、途中で帰って来た」

「どこへ行きました」

「築地へ廻つた」

きょうの一件を聞かされて、幸次郎は熱心に耳を傾けていた。

「親分。その一件なら、わっしも少し聞き込んだことがあります。御承知の通り、あの辺には屋敷が多いので、わっしも大部屋の奴らを相当に知っていますが、この間からいろいろの噂を聞いていますが、噂という奴はどうも取り留めのないもので……。だが、親分。ここに一つ面白いことがあります。こりやあ聞き捨てにならねえと思うのですが……」

「聞き捨てにならねえ……。どんなことだ」

「あの一件の当日、主人の因幡という人は陸おかを帰る筈だったそうです。こういうことになるせいか、因幡という人は船が嫌いで、いつも砂村へ行く時には、片道は船、片道は陸と決まっているので、当日も船で行って、陸を帰るといふ筈だったのを、どういう都合か、帰日も船ということになって、あんな災難に出逢った……。運が悪いと云えば、まあそれ迄のことですが、何か又そこに理窟がないとも云えませんね。陸を帰れば無事に済んだものを、その日にかぎって船に乗って、その日に限って船が沈む……」

「むむ。運が悪いというほかに、なにかの仔細が無いとも云えねえな」

「それだから、わっしの鑑定はまあこうですね」と、幸次郎は少しく声を低めた。「だれが細工をしたのか知らねえが、恐らく主人を殺すつもりはなかった……。主人はいつもの通りに陸を帰ると思っていたところが、どうしてか船で帰ることになったので、云わば飛

ばつちりの災難を受けたような形かと思われますね。女中三人は勿論そば杖でしょうから、そうなると妾のお早か、お嬢さまのお春か、その一人が目指されることになります。年の行かねえお嬢さまが殺されそうにも思われねえから、目指す相手はまあお早でしょうね」

「そうすると、細工人は奥さまか」と、半七は半信半疑の眉をよせた。

「まあ、そんなことらしいようですね。お早というのも評判の悪くない女ですが、なんと云つても本妻と妾、そこには人の知らない角突つき合いもあるうと云うものです。奥さまが半気違いのようになつて自分の屋敷に瑕が付いても構わないから、本当のことを調べあげてくれなぞと云うのも、自分のうしろ暗いのを隠そうとする為かも知れませんかからね」

「心にもない亭主殺し……。それはまあそれとして、娘殺しはどうする。いくら妾が憎いと云つても、我が生みの娘まで道連れにさせることはあるめえ。なんとかして妾ひとり殺す法もあろうじやあねえか」

「いや、そこには又相当の理窟があります。お嬢さまのお春というのはお人形のように可愛らしい娘で、気立ても大変おとなしいのですが、どういうわけか子供のときから妾のお早によく狎なついて、お早も我が子のように可愛がつていたと云うことです。ねえ、親分。これはわっしの推量だが、奥さまの眼から見たら、お早は自分に子供が無いので、お春を手

なずけて我が子のようにして、奥さまに張り合おうという料簡だろうと思われるじゃありませんか。そうになると、我が子でもお春は可愛くない。いつそお早と一緒に沈めてしまえと、むごい料簡にならないとも限りますまい」

「いろいろ理窟をつけて考えたな」と、半七はほほえんだ。「それもまんざら無理じゃあねえ。女は案外におそろしい料簡を起こすものだ。そこで先ず奥さまの細工とすると、奥さまが直じき々に船頭に頼みやあしめえ。誰か橋渡しをする奴がある筈だが……」

「それは女中のお信でしょう」

「むむ、船宿の姪か。そうするとお信は生きているな」

「船宿にいて、小田原町の河岸に育った女ですから、ちつとは水ごころがあるのでしよう。陸へ這いあがって、どっかに隠れているのだろうと思います」

「そんなことが無いとも云えねえ」

大阪屋花鳥の二代目かと、半七は口のうちでつぶやいた。しかも花鳥の一件とは違って、これはなかなか面倒の仕事である。たとい万事が幸次郎の鑑定通りとしても、それは当て推量に過ぎないのであるから、動かぬ証拠を押さえなければならぬ。

「こうなると、どうしてもお信と千太のゆくえを探し出さなけりやあならねえ。おめえ一

人じゃあ手が廻るめえから、亀か庄太に手伝つて貰え。おれは妾の宿やどへ行つてみようと思
うが、お早はどこの生まれだ」

「浅井の屋敷へ出入りの植木屋の娘だとかいうことですが、宿はどこだか知りません。な
に、そりやあすぐに判りますから、あしたにでも調べて来ます」

幸次郎は請け合つて歸つた。雨はひと晩降りつづけて、明るる朝はうららかに晴れた。

「こりやあ拾い物だ」と、半七は窓から表の往来をながめた。気の早い彼岸ひがん桜はもう咲き
出しそうな日ひより和である。御用でなくても、こういう朝には何処へか出て見たいように思わ
れたが、お早の宿が判らないので無闇に踏み出すことも出来ない。半七は落ち着かない心
持で半日を無駄に暮らして、幸次郎の報告を待ちわびていると、午頃になって彼は駈けつ
けた。

「どうも遅くなって済みません。近所の屋敷の奴を二、三人たずねたのですが、あいにく
どいつも留守で手間取りました。だが、すっかり判りました。浅井の妾の親許は小梅の植
木屋の長五郎、家うちは業なり平橋ひらの少し先だそうです」

「よし、判つた。それじゃあ俺はすぐに小梅へ行つて来る。ゆうべも云う通り、おめえは
誰かの加勢を頼んで、お信と千太のゆくえを探してくれ。ひよつとすると、築地の三河屋

へ忍んで来ねえとも限らねえから、あすこへも眼を放すな」

云い聞かせて、半七は早々に家を出た。吾妻橋を渡つて中の郷へさしかかると、その当時のここらは田舎である。町屋まちやというのは名ばかりで百姓家が多い。時にしもた家があるかと思えば、それは「梅曆」の丹次郎の佗び住居のような家ばかりである。ふだんから往来の少ない土地であるから、雨あがりのぬかるみは深い。半七も覚悟して日和下駄はを穿はいて来たが、その下駄も泥に埋められて自由に歩かれないくらいである。

それをどうにか通り越して、南蔵院という寺の前から、森川伊豆守いずのかみの屋敷の辻番所を横に見て、業平橋を渡つてゆくと、そこらは一面の田畑で、そのあいだに百姓家と植木屋がある。長五郎の家をたずねるとすぐに知れた。

大きい旗本屋敷に出入り場もあり、娘を浅井の屋敷に勤めさせて相当の手当てを貰つてゐる為であろう、長五郎の家はここらでも目立つほど大きい構えで、広い植木溜めにはたくさんの樹木が青々とおい茂つていた。門口かどぐちには目じるしのような柳の大木が栽うえてあつて、まばらな四目垣よつめがきの外には小さい溝どぶがわ川が流れていた。その土橋を渡つて内へはいると、鶏がのどかそうに時を作つてゐるばかりで、家内はしんかんと鎮まっていた。

不幸後まだ間もないのであるから、それも無理はないと思ひながら、半七は入口らしい

方を探してゆくと、南向きの縁さきへ出た。ここにも見上げるような椿の大木が、紅いつぼみをおびただしく孕はらませていた。

「御免なさい」

二、三度呼ばせて、奥からようよう出て来たのは、四十五六の女房であつた。これがお早の母であろうと想像しながら、半七は丁寧えしやくに会釈した。

「実はわたくしは築地の浅井さまへ多年お出入りを致して居ります建具屋でございしますが……。このたびは何とも申し上げようもない次第で……。早速お悔くやみに出る筈でございしましたが、かぜを引いて小半月も寝込んでしまひまして、ついつい延引いたしました」

用意して来た線香の箱に香こうでん奠の紙包みを添えて出すと、女房は嬉しそうに、気の毒そうに受け取つて、これも丁寧えしやくに礼を述べた。いかに多年の出入りでも、特別の関係がない限りは、妾の親許まで悔みに来る者はない。正直らしい女房は、建具屋と名乗つて来た男の厚意をよろこんで、早速に内へ招じ入れた。半七は奥へ通つて仏壇に焼香して、ふたたび元の縁さきへ戻つて来ると、女房は茶や煙草盆の用意をしていた。彼女は果たしてお早の母のお富であつた。

「悪いときには悪いもので、親類うちに又不幸がありました、親父はゆうべから戻りませ

ん」

遠方を来たのであるから、まあゆつくり休んで行けど、お富は云った。どう見ても、悪意の無さそうな女である。引き留められたのを幸いに、半七は坐り込んで煙草を吸いはじめると、せんそうじ浅草寺の八ツ（午後二時）の鐘がきこえた。

四

半七とお富と、初対面の二人のあいだに変わった話題はない。殊に今の場合であるから、話は当然かの一件をくり返すことになって、娘をうしなつた母の眼からは、また今さらに新らしい涙が湧いた。お富の話によると、亭主の長五郎も正直な職人かたぎ気質の人物であるらしく、娘は多年御恩を受けた殿さまのお供をしたのであるから、死んでも悔むことは無いと云っている。又、それに就いて、お屋敷の御迷惑になるような事は決して口外してはならないと、女房らをも堅く戒めているとのことであつた。

「親方の御料簡はよく判っています」と、半七も同情するように云った。「しかし世間の口はうるさいもので、今度の一件に就いてもいろいろの噂を立てる者がありますよ」

「どんなことを云つて居ります」と、お富は眼をふきながら訊いた。

「実は……。お前さん達の前じやあ云にくい事ですが……。」と、半七は渋りながら答えた。「誰かが船底へ細工をして……」

「やつぱりそんなことを云つて居りますか」

「お部屋さまを沈めようとした……」

云いかけて相手の顔色を窺うと、お富は黙つて考えていた。

「そんなことを云つちやあなんです……。どこのお屋敷でも、奥さまとお部屋さまとは折り合いのよくないもので……」

「あれ、お前さん。飛んでもない」と、お富はたしなめるように云つた。「それじやあ奥さまが何か細工をして、内の娘を沈めたとでも云うのですかえ。そりやあ違います、大違いです。お屋敷の奥さまに限つて決して決して、そんな事をなさるような方かたじやありません。奥さまはまことに結構なお方で、それはわたしが請け合います。一体お前さんはそんなことを誰に聞いたのです」

激しい権幕で詰問されて、半七も少しく返事に困つた。

「いや、奥さまに限つたわけじやありませんが、お屋敷には大勢おおせいの男もいる、女もい

る。その大勢のうちには自然こちらの娘さんと仲の悪い者も無いとは云えません。何かのことで娘さんを恨んでいる者も無いとは限りませんから……」

「そりゃあ恨まれていても知れませんが……」

何か思いあたることでもあるらしい口ぶりに、半七は透かさず訊き返した。

「世の中には外道げいどうの逆恨みさかと云つて、自分の悪いのを棚にあげて、人を恨む者もありますからね。何かそんな心あたりでもありませんかえ」

お富はまた黙つてしまった。この夫婦は自分でも云う通り、屋敷の迷惑になることは決して口外しまいと決めているらしい。その堅い口を明かせるには、自分も頭巾ずきんをぬいで正体を現わすのほかはないと半七は思った。

そこで、彼は自分の身もとを明かした。しかもこれは町方から進んで詮議するのではない。奥さまや親類の諸屋敷から頼まれたのであることを詳しく説明して聞かせると、お富の態度も少し變つて来た。

「そういうわけだから、なんでも正直に云つてくれねえじゃあ困る」と、半七は諭さとすように云つた。「おめえは奥さまは結構な方だと云うが、今のところ、その奥さまが一番疑われているのだ。奥さまの為を思うならば、知っているだけの事をみんな云うがいいじゃあ

ねえか。おれも男だ。屋敷の迷惑になるような事は決して他言しねえから、おれだけに云うと思つて話してくれ」

「でも、確かな証拠もないことは……」と、お富はまだ躊躇しているらしかった。

「いや、おめえの云つたことをすぐに証拠にするわけじゃあねえ。ただ心得のために聞いて置くだけのことだ。おめえの娘は此の頃ここへ訪ねて来たかえ」

「去年の暮れにまいりました」

「ひとりで来たのか」

「お信という女中を連れて来ました」

「お信はどんな女だ」

「容貌きりようの悪くない、なかなかしつかり者のようです」

それは船頭の金八の話と符合していたが、お富がお信という女に好意を持っていないらしいのは、その口ぶりで察せられた。

「自分の供に連れて来るようじゃあ、おめえの娘の気に入りなんだね」

「別に気に入りというわけでもございません。お屋敷内では話すことの出来ない内証話があるのです、きょうの供に連れて来たのだと申しまして、奥で暫く差し向かいで話して居り

ました」

「どんな話をしていたか判らなかつたかね」

「わたくし共はあちらへ遠慮して居りましたので、二人とも小さな声でひそひそと話し合つて居りましたので、どんな話をしていたのか一向に判りませんでした」

「帰る時はどんな様子だった」

「二人とも顔色がよくないようである……。取り分けてお信は真まっさお蒼な顔をして居りました」

「娘はそれつきり来ねえのだね」

「春になつては一度も参りません。去年の暮れに顔を見せましたのが一生の別れでございます」と、お富はまた泣き出しました。

お早とお信が、ここでどんな密談を遂げたのか。この二人はそもそも敵か味方か。帰るときに二人の顔色が悪かつたのはどういうわけか。それは容易に解き難い謎であるので、半七もさすがに思案に悩んだ。

「その日はまあそれとして、その前に娘から何か聞き込んだことは無かつたかえ」と、半七はまた訊いた。

「いえ、お屋敷内のことに就きましては、娘は別になんにも申しませんでした」

この時、突然、奥の襖をあけて、五十前後の男が姿をあらわした。

「いらつしやいまし。わたくしは植木屋の長五郎でございます」と、彼は半七の前に手をついて丁寧^{ていねい}に会釈した。「親類に不幸がございまして、昨晚から手伝いに参つて居りまして、只今ちよいと帰つて参りました」

彼はさつきから戻つて来て、女房と半七との問答を偷み聴いていたらしかつた。それを察して、半七は向き直つた。

「今もおかみさんと話していたところだが、今度の一件について何か入り組んだ訳がありそうだが……」

「それに就きまして、親分さん。もう斯^こうなれば正直に申し上げますが……」

あちらへ行けと眼で知らされて、お富は不安そうに立ち去ると、そのうしろ姿を見送つて、長五郎はささやくように云い出した。

「こんなことを女房に云つて聞かせますと、余計な心配も致しますし、女は口の軽いもので又どんなおしやべりをしないともしませんから、実は女房にも隠して居りましたが、去年の十月、娘が寺参りながらここへ参りました時に、女房はちょうど留守でございました、わたくしと差し向かいで暫く話して帰りましたが、その時に娘の口からちらりと聞い

たことがございますので……」

「むむ」と、半七も思わずひと膝乗り出した。「どんなことを聞かされたね」

「別に取り留めた事でもないので……」と、長五郎はまた躊躇した。

「ここでおめえが何を云おうとも、おれはみんな聞き流しにする。おめえは勿論、屋敷へも決して迷惑はかけねえ。遠慮無しに話してくれ」と、半七は催促するように云った。

「はい」

「いつまでも焦^じらしていちやあいけねえ。おれだって洒^{しや}落^れや冗^き談に訊^きいているのじゃあねえから、そのつもりで返事をしてくれ」

半七もやや焦れて来た。

云おうとして云い得ないように、長五郎はいつまでも渋っていた。

五

その明くる日の朝、幸次郎が半七の家^{うち}へ忙がしそうにはいつて来た。

「お早うございます。早速ですが、ゆうべちつと変なことがありますね」

「なんだ。馬鹿に早えな」

顔を洗ったばかりの半七が茶の間の長火鉢の前に坐り直すと、幸次郎は直ぐに話し始めた。

「実は庄太と手分けをして、わっしは築地の三河屋の近所に張り込んでいて、ゆうべのかれこれ四ツ（午後十時）頃でしたらう。あの船宿から頬かむりをして出て行く奴がある。小半町ばかり尾けて行つて、本願寺橋の袂でだしぬけに『おい、兄あに』と声をかけると、そいつはびつくりしたように振り返る。よく見ると、まんざら知らねえ奴でもねえ、深川の寅という野郎で……」

「深川の寅……。どんな奴だ」

「やつぱり船頭で、大島町ちまうの石置場の傍にいる寅吉という奴です。船頭といつても、博奕が半商売で、一つ間違えば伝馬町てんまちょうへくらい込むような奴で……。そいつが三河屋から出て来たから、こりやあ詮議物だと思つて、いろいろに膏あぶらを絞つてみたのですが、友達の千太をたずねて来たと言うばかりで、ほかにはなんにも云わねえのです。千太は居たかと訊くと、このあいだから姿を隠しているの、三河屋でも探していると云うのです。なんの用で千太をたずねて来たと言うと、例の一件以来、大島町の方へも顔も見せねえので、ど

うしているのかと案じて来たと言うのです。いつまで押し問答をしても果てしがねえから、一旦はそのまま放してやりましたが、あとでよくよく考えると、千太をたずねて来たと言うのは嘘で、実は千太の使に来たのじやあねえかとも思うのですが……」

「そうすると、寅という奴は千太の居所を知っているわけだな」

「そうです。いつそ挙げてしましましょうか」

「まあ、急せくな」と、半七は制した。「迂濶に寅の野郎を引き挙げると、肝腎の千太が風をくらつて、どこかへ飛ばねえとも限らねえ。まあ、当分はそのままにして置いて、出這入りを見張っている」

「ようがす」

幸次郎は引き受けて帰った。半七はそれから牛込の堀田、京橋の須藤、深川の菅野の屋敷をまわつて用人らに内密の面会を求めたが、或いは用人が留守だといひ、或いは面会は出来ぬといひ、この事は八丁堀役人の方へ申し入れてあるから、訊きたい事があるならばそれに訊いてくれ、当屋敷で直接の対談は断わると云い、いずれも申し合わせたように門前払いである。それでは取り付く島がない。自分の方から頼んで置きながら何のことだと、半七は肚はらのうちで舌打ちしたが、武家屋敷の仕事は大抵こんなものと覚悟しているので、

小梅の長五郎から聞き出した一種の秘密を唯一の材料にして、ひそかに探索を進めて行くのほかは無かった。

こんなわけで、とにかくに仕事が捗取らず、半七らを苛々させていると、それから十日ばかりの間に、二つの事件が出来来して、更に彼等を苛立たせた。その一つは二月二十三日の朝、かの深川の寅吉という船頭が何者にか殺害されたことである。浄心寺のうしろは山本町で、その山本町から三好町の材木置場へ通うところに小さな橋がある。寅吉の死骸はその橋の下に浮かんでいたが、右の肩先からうしろ袈裟に斬られているのを見ると、その相手は恐らく武士で、うしろから一刀に斬り倒して、死骸を河へ投げ落としたのであろうと察せられた。

検視の上、このごろ流行る辻斬りの仕業であろうということになったが、辻斬りをする者がその死骸をわざわざ河のなかへ投げ込んでゆく筈がない。幸次郎の報告によって、その下手人が誰であるかを半七は大かた推量していた。寅吉の出入りを尾けていた幸次郎は、彼が何処をどう歩いて、何者に斬られたかを窺かに見とどけたのであった。下手人は物蔭に窺っている幸次郎のすがたを見て、一目散に逃げてしまった。

次は二月二十八日の朝、築地南小田原町の河岸に心中の男女の死骸が発見された。それ

は彼の^か三河屋の前の河岸につないである屋根船のなかの出来事で、その船は浅井の屋敷の人々を沈めたという因縁つきの物である。浅井の一件が落^{らく}着^{ちやく}次第、当然焼き捨てらるべき船のなかで、更に第二の悲劇が演ぜられたのは、いわゆる呪いの船とでも云うべきであらうか。

しかもこの心中は噂ばかりで、その実際を見とどけた者は少なかった。その噂を聞き伝えて見物人が寄り集まつて来る頃には、二つの死骸はすでに取り片付けられて、形見の船が春^{はる}雨^{さめ}に濡れているばかりであった。

「心中は綺麗な若いお武家と、若い女だ」

それを見た者は云い触らした。男は十七八の美しい武士で、女は二十歳前後の、武家奉公でもしていたらしい風俗である。二人は船のなかに座を占めて、男は脇差で先ず女を刺し殺し、自分も咽喉^{のど}を掻き切つて死んでいた。

そのうちに、又こんな噂をする者もあらわれた。

「男は近所の浅井さまの御子息らしい。女は三河屋のお信だ」

前にも云う通り、二つの死骸は早くも取り片付けられてしまったので、それらの事も結局は噂ばかりに留まつたが、その噂の嘘でないことを半七は知っていた。

「おい、幸。飛んでもねえ事になつてしまつたな」

「まったく驚きました。お信を早く探し出せば、こんな事にやあならなかつたのですが……」と、幸次郎も残念そうに云つた。

「それに浅井の屋敷もよくねえ。今じやあ家督を相続している小太郎という人が、二、三日前から家出しているのを黙つてゐることはねえ。八丁堀の旦那衆の方へ内々で沙汰をして置いてくれりやあ、なんとか用心の仕様もあつたものを……。そうは云うものの、それからそれへと悪い事つづきで、屋敷の方でも面目ねえから、旦那方へは沙汰無しで、内々そのゆくえを探してゐたのだから……。もうこの上は仕方がねえ。三千石の屋敷も潰れる」

「潰れるでしょうね」

「先代の主人の水死は不時の災難としても、又そろこの始末だ。所詮助かる見込みはあ
るめえよ」と、半七は嘆息した。「考えてみると、おれも悪かつた。このあいだ小梅の長五郎の話を聴いた時に、すぐに旦那に知らせて置けばよかつた。そうしたら、旦那の方から浅井の屋敷へ内通して、若主人の出入りを嚴重に見張らせたかも知れねえ。お屋敷のお名前にもかかわる事だから、決して他言してくれるなど長五郎に泣いて頼まれたので、お

れもなんだか可哀そうになって、今まで口を結んでいたのが却っていけなかつたようだ。この商売は涙もろくちやあいけねえな」

「近頃こんなドジを組んだことはありません。そこで、親分。これからどうします」

「まだこれで幕にやあならねえ。お信が生きていた以上は、千太もどこから這い出して来るか判らねえ」

「それじゃあ、やつぱり深川を見張っていますか」

「まあ、そうだ。寅吉の家の近所うちを見張っているほかはあるめえ」

寅吉は独り者であるから、家族について調べるという術すべもない。近所の者が集まって投げ込み同様の葬式を済ませたので、その家は空あきだな店になつたままである。それを知らずに、千太が忍んで来ることが無いとも云えない。それを目あてに張り込んでいたのである。

「おめえと庄太は気長に深川の番をしていてくれ」と、半七は云つた。「あいつも亦ばつさりやられてしまつた日にやあ玉無しだ」

幸次郎を出してやつた後、半七は又しばらく考えていた。武家屋敷に係り合ひの仕事は元来面倒であるとは云いながら、今度の一件は万事が喰い違ひの形で、とにかく後手ごてになつたのは残念でならない。浅井の屋敷に瑕が付いても構わないから、事件の正体突きと

めてくれと、奥さまは半気がいになつて頼んだそうであるが、その屋敷も所詮潰れるのである。思えば奥さまは気の毒である。せめてはその望み通りに、この事件の顛末を明らかにして、奥さまに一種の満足にあたえるのが自分の役目であると、半七は思った。

そのうちに、彼は何事かを思いついて、ふらりと神田の家を出た。二十八日の宵である。きよようの春雨も其の頃には晴れたが、紗しやのような薄い霧もやが朦朧もうろうと立ち籠めて、行く先は暗かった。大通りの店の灯ひも水のなかに沈んでいるように見えた。半七はその霧に包まれながら、築地の方角にむかった。

南小田原町へ辿り着いて、船宿の三河屋を表から覗くと、今夜は軒の行燈をおろして、商売を休んでいるらしかった。隣りの竹倉という船宿で訊くと、お信の死骸は検視が済むや否や、すぐに下谷稲荷町いなりちやうの女房の里方へ運んで、今夜はそこで内々の通夜つやをするらしく、三河屋の家内はみな下谷へ出て行って、亭主の清吉ひとりが留守番をしているとの事であった。

半七は再び三河屋の店さきに立って声をかけると、奥から亭主が出て来た。清吉はもう四十以上の頑丈そうな男で、半七を見て、仔細らしく顔をしかめたが、又すぐに打ち解けて挨拶した。

「親分でございましたか。まあ、どうぞこちらへ……」

「どうも悪いことが続いて、お気の毒だね」と、半七は店さきに腰をおろした。「そこで清吉。今夜は御用で来たのだから、そのつもりで返事をしてくれ」

清吉は形をあらためて、無言でうなずいた。

「早速だが、おめえに訊きてえことがある。姪のお信は先月の一件以来、小ひと月のあいだ何処に忍んでいたのだね」

「存じません」と、清吉ははっきりと答えた。「実は何処から出て来たのかと、わたくしも不思議に思っている位でございます。小ひと月も便りがありませんので、死骸は遠い沖へ流されてしまって、もう此の世にはいないものと諦めて居りましたのに、それが不意に出て来まして、しかもこの河岸であんな事を仕出来しでかまして……。なんだか夢のよううでございます」

「まったく悪い夢だ。実はおれも可怪おかしな夢を見たよ」と、半七は笑った。

「へえ」

「その夢を話して聞かそうか」

「へえ」

なにを云うのかと、清吉は相手の顔をながめてみると、半七はやはり笑いながら話しつづけた。

「なにしろ夢の話だから、辻褄つじつまは合わねえかも知れねえ。まあ、聴いてくれ。ここに大きい屋敷があつて、本妻の奥さまとお部屋のお妾がある。奥さまも良い人で、お妾も良い人だ。これじゃあ御家騒動のおこりそうな筈がねえ。ところが、ここに一つ困ったことは、その奥さまの腹に生まれた嫡子の若殿さまというのが素晴らしい美男だ。どこでもいい男には女難がある。奥さまにお付きの女中がその若殿さまに惚れてしまった。昔から云う通り、恋に上下の隔てはねえ。女は夢中になつて若殿さまにこすり付いて、とうとう出来合つてしまつたという訳だ。どうで本妻になれる筈はねえが、こうなつた以上、せめてはお部屋さまにでもなつて、若殿さまのそばを一生離れまいという……。こりやあ無理もねえことだが、さてそれがむずかしい。勿論お妾だから、身分の詮議は要らねえようなものだが、女は男よりも年上で、おまけになかなかのしつかり者で、まかり間違えば御家騒動でも起こしそうな代物しろものだ。そんな女を若殿さまに押し付けて善いか悪いか。こうなると、ちつと事面倒になるじゃあねえか。ねえ、そうだろう」

云いかけて清吉の眼色を窺うと、彼はそれを避けるように眼を伏せた。年の割には白髪しらが

の多い小鬢のおくれ毛が、薄暗い行燈のひかりの前にふるえていた。

「燈台下暗しもとという譬えもある。まして大きい屋敷内だから、若殿さまと女中との一件を誰もまだ感付いた者がねえ。殿さまも奥さまも御存じ無しだ。ところが、悪いことは出来ねえもので、それをどうしてか若けえお嬢さまに見付けられた。すると、このお嬢さまが又、生みの親の奥さまよりも不思議にお妾の方に狎なついていたので、それをそつとお妾に教えたのだ。お妾もすぐにそれを奥さまか用人にでも耳打ちして、なんとか取り計らえばよかつたのだが、自分ひとりの胸に納めて置いて、誰にも知らさずに穩便に済まそうと考えた。お妾はもちろん悪意じゃあねえ、若殿さまに瑕を付けめえという忠義の料簡から出たことだが、その忠義が仇あだとなつて飛んだことになつてしまった。というのが、去年の暮れに、お妾は自分の親もとへ歳暮せいぼの礼に行った。その時にかの女中を供に連れて出て、こつそりと意見をした。若殿さまのことは思い切つて、来年の三月の出代りには無事にお暇を頂いて宿へ下がつてくれ、と因果を含めて頼むように云い聞かせた。それも屋敷の為、当人たちの為を思つたことだが、女中の方はもう眼が眩くらんでいるから、そんな意見は耳にはいらねえばかりか、却つて其の人を恨むようにもなつた。お妾が余計な忠義立てをして、無理に自分たちの仲を裂くのだと一途いちぢずに思い込んで……。おい、清吉。おれの夢はこころ

で醒めたのだが、その先はおめえがよく知っている筈だ。今度はおめえの夢の話聞かせ
て貰おうじゃあねえか。おめえの話も長そうだ。おれは一服吸いながら聞くぜ」

半七は腰から筒ざしの煙草入れを取り出して、しずかに煙草を吸いつけると、清吉はや
がて崩れるように両手をついて平伏した。

「親分、恐れ入りました。ひとりの姪が可愛いばかりに……。お察しください」

「それはおれも察している。おめえが悪い人間でねえことは世間の評判で知っている。そ
れにしても、仕事があんまり暴^あつぽいぜ。いくらおめえ達の商売でも、カチカチ山の狸の
土舟のようなことをして、殿さまを始め大勢の人を沈めて……」

「仰しやられるまでも無く、わたくしも今では後悔して居ります。どうしてあんな大胆な
ことをしたかと、我れながら恐ろしい位でございます。たった一人の姪が泣いて頼みます
ので……。ふいと魔がさして飛んでもない心得違いを致しまして……。なんとも申し訳が
ございません」

汗か涙か、清吉の蒼い顔は一面に湿^ぬれていた。

「なかなか入り組んだ話ですね」と、私はここまで聞かされてひと息ついた。

「さあ、入り組んでいるようですが、筋は真つ直ぐです」と、半七老人は笑った。「ここまでお話しすれば、あなた方にも大抵お判りでしょう」

「まだ判らないことがたくさんありますよ。これまでのお話によると、そのお信という女が自分の恋の邪魔になるお早という妾を殺そうとして、叔父の清吉を口説いて船底に機関を仕掛けたというわけですね。かたきの片割れだから、お嬢さまも一緒に沈めてしま
う……」

「殿さまを殺す気はなかったが、あいにく其の日に限って、殿さまも船で帰ったので、云わば傍杖そばづえの災難に出逢ったのですよ。運の悪いときは仕方のないものです」

「お信は大阪屋花鳥の二代目ですね」

「そうです。子供のときから築地の河岸かしに育ったので、相当に水みづ心こころがあつたと見え
ます。こんにちでは海水浴が流行はやって、綺麗な女がみんなぼちやぼちやりますが、江戸時代には漁師の娘ならば知らず、普通の女で泳ぎの出来るのは少なかつたのです。花鳥も
信も泳ぎを知らなかつたら、悪いことを思い付かなかつたかも知れません」

「そこで千太という船頭はどうしました」

「それには又お話があります」と、老人は説明した。「千太は親方の指図だから忌^{いや}とは云われません。もちろん相当の金^{かね}轡^{ぐつわ}を喰^はまされたんでしよう。ともかくもこの役目を引き受けて、浅井の人たちを砂村の下屋敷へ送り付けて、その帰りを待っているあいだに船底をくり抜いて置いたんです。いざというときに自分は泳いで逃げ、一旦は三河屋へ帰ったんですが、いろいろの詮議を受けると面倒だということで、親方の指図で姿を隠してしまつたんです」

「そうして、どこに隠れていたんです」

「友達の寅吉の家へ逃げ込んで、戸棚のなかに隠れていたそうです。寅吉も悪い奴で、万事を承知で千太をかくまい、千太の使だと云つて時々三河屋へ無心に出かけていたんですが、この寅吉を斬った者がよく判りません。寅吉の出入りを尾^つけていた幸次郎の話によると、寅吉が山本町の橋の袂へ来かかった時に覆面の侍が足早に追つて来て、一刀に斬り倒したのだそうで、恐らく菅野の屋敷の者だろうと云うんです。菅野は前にも申した通り、浅井の奥さまの里方で深川の浄心寺わきに屋敷を持っている。そこへ今度の一件を種にして、寅吉は何か強請^{ゆすり}がましい事でも云いに行つたらしい。屋敷の方でも面倒だと思つて、

一旦は幾らか握らせて帰して、あとから尾けて行つてばつきり……。わたくしは門前払いを喰つただけでしたが、寅吉は命を取られてしまいました。なにしろ寅吉が殺られてしまったので、千太はどうすることも出来ない。よんどころなく其処を逃げ出して、それからそれへと友達のところを転げ歩いていたんですが、どこでも係り合いを恐れて長くは泊めてくれない。そのうちに親方の清吉がわたくしの手に挙げられたという噂を聞いて、もう逃げ負せられないと覚悟したのでしよう。自分で尋常に名乗つて出ましたが、吟味中に牢死しました」

「お信は清吉の女房の里に隠れていたんですか」

「お信は岸へ泳ぎ着いて、濡れた着物の始末をして、自分だけ助かつたつもりにして屋敷へ帰る筈だったんですが……。それが俄かに気が変わったのは、船がいよいよ沈むという時に、お妾のお早がただ一言『信』と云つて、怖い眼をして睨んだそうです。さては覺られたかと思うと、お信は急におそろしくなつて、夢中で岸までは泳ぎ着きながらも、もう再び屋敷へ戻る気になれなくなつたということです。暫く何処にか隠れていて、暗くなるのを待つて下谷の稲荷町、すなわち清吉の女房の里へ尋ねて行つて、そこに五、六日隠まつて貰つて、それから又こつそりと築地の三河屋へ戻つて来て、その二階に忍んでいたん

です。わたくしが最初に三河屋へ出張つて、船頭の金八を詮議していた時、お信は二階に隠れていたわけです、が、その儘うっかり帰つて来たのはわたくしの油断でした。

そこで、お信がどうして浅井の若殿さまを誘い出したのか、それは清吉も知らない。若殿さまは唯だしぬけに尋ねて来たのだと云つていましたが、何かの手だてを用いて呼び出したに相違ないと思われます。若殿さまは三河屋の二階に泊まつて、その夜のうちにお信と一緒にぬけ出して、例の屋根船のなかで心中したんですが、清吉はそれをちつとも知らなかつたと云う。これも甚だ怪しいと思われます。第一、若殿さまを自分の家に泊めるといふ法はない。その屋敷はすぐ近所にあるんですから、夜が更ふけても送り帰るのが当然であるのに、平気で自分の二階に泊まらせて、こんな事を仕出しで来たのは、重々申し訳のない次第です。浅井の屋敷では二日前に家出したと云い、清吉はその晩に來たと云い、その申し口が符合しないんですが、或いは二日前から三河屋に忍ばせて置いたのかも知れませんが。

それらのことを考えると、お信はしよせん自分の望みは叶わないと覺悟して、叔父の清吉と相談の上で、若殿さまを冥途めいどの道連れにしたらしい。清吉も姪めいが可愛さに、若殿さまを二階に忍なばせて、十分に名残なごりを惜なしませた上で、二人を心中に出してやっただらうと

思われます。船の一件が露頭すれば、清吉もお信もどうで無い命、殊にお信はしつかり者だけに執念深い。それに魅みこまれた若殿さまはお気の毒のようですが、この人は女に惚れられるような美男に生まれ付いただけに、体も弱く、気も弱い質たちで、年もまだ十七、無事に家督を相続したものの、親や妹には不意に死に別れ、お信はゆくえ知れず、唯ぼんやりとしているとところへ、死んだと思つたお信が突然にあらわれて来て、それにいろいろ口説かれたので、ついふらふらと死ぬ気になつたんでしよう。今更のことじゃあないが、女に惚れられると恐ろしい。若殿さまがお信という女に惚れられた為に、これほどの大事件がしゅつたい出しゅつ来たいして、三千石の家は見ごとに潰れてしまいました」

「お嬢さまの死骸はどうとう揚がらなかつたんですか」と、わたしは最後に訊きいた。

「いや、そのお春というお嬢さまは……」と、老人は悼いたましそうに顔をしかめた。「何処をどう流れて行つたのか知りませんが、房州の沖で見付かりました。これは後に聞いたことですが、房州の漁師が沖へ出て、大きな鮫を生け捕つて来て、その腹を裂いてみると、若い女の死骸がころげ出た。その時には何者か判らなかつたんですが、着物や持ち物が証拠になつて、その女は浅井のお嬢さまだということが知れたそうです。揃揃いも揃揃つて何となく運運の悪いことか、ままつたくお話話になりません。浅井の奥さまのお蘭という人は里方の

菅野家へ戻りましたが、亭主は水死、息子は心中、娘は右の始末ですから、いよいよ半気
違いのようになってしまつて、それから間もなく死んだということです。三河屋の清吉も
千太と同様、吟味中に牢死しました」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（五）」 光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年10月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

1999年4月11日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

新カチカチ山

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>